INFORMATION

秋たけなわ。應典院でも多くの催しが開催されます。
中でも、寺町倶楽部会員自らが企画・出演するイベントも、いよいよ動き出しました。興味のある方は、ぜひご参加ください。
自分でもぜひこんな企画がしたい！、という方は、事務局までどしどしご連絡ください。いろんな形で、サポートしまっせ！

なにわ映像総研〜映画夜話〜

映画とは何か。何を語り、どう変わってきたのか。こんな思いから「映像総研」という会をやらせていただくことになりました。今回のイベント「映画夜話」では、プロデューサー、ライター。映写技師、劇場支配人、監督というメディアの実像に一歩でも近づければと思っております。

9月24日、その第1夜を開催し應典院住職・秋田光彦氏に映画プロデューサー時代のお話からインディーズ映画に対する想いを熱く語っていただき、現在の自主製作映画の実情もお聞きしました。

次回は、関西を中心に活躍中の映画ライター、春岡勇二氏をお招きして映画ライターというお仕事、最近の映画事情などをお話しいただく予定です。知らなかった映画の側面が見られるかもしれません。是非、ご参加ください（武藤貴信）。

【第2回　映画が目に沁みる】
・10月22日(木)　19:00〜21:00
・参加費　¥500
・問い合わせ　Tel0722-62-0769

写真屋なぎちゃんの写真考座

みんなで写真の撮り方について語り合いませんか。これから始めたい方、始めたけれどどうしていいのかという方、今よりちょっとうまくなりたい方……。年齢、性別はもちろんレベルも、機材も問いません（でもインスタントはちょっと……）。

みんなで楽しく趣味の世界を広げてみませんか。

【第1回目】
・10月27日（木）　19:00〜
・定員10名
・費用　無用。但し、フィルム等の実費は各自負担。
・持ち物　自前のカメラ
・問い合わせ
寺町倶楽部　Tel06-771-7641

ぐるぐるＬＩＶＥ

知る人ぞ知るネオン街の似顔絵師秋元裕美子のらくがきアート「電話の横で…展」が、10月13日から31日まで、應典院ギャラリーで開催されます。應典院ギャラリーは、館内の壁面を開放した自由空間。電話をしながらぐるぐる描いたらくがきが、不思議なアートとなって登場。そのオープニングを兼ねて、らくがきアートとプロ・ミュージシャンのセッションライブ「ぐるぐるＬＩＶＥ」も行います。

出演は、トランペットのハッチ濱本、ピアノの川本比佐志、キーボードの森川温美ら。「電話で…」の作品を観て創られた曲や即興演奏、そして音楽にのって、秋元裕美子のライブ・ペインティングが繰り広げられます。司会は宮田若菜。

秋の一夜、應典院でアーティスティックナイトをぜひ。
・10月13日（火）19:00〜
・700円
・問い合わせ　Tel06-624-5655

■寺子屋トーク　第12・13弾連続開催!!

「子どもの力を引き出すプログラムについて」

昨年9月に行われたＣＡＰ講演会の第2弾。ＣＡＰとは、米国で開発された子ども虐待、いじめ防止教育のプログラム。講師にＣＡＰプロジェクト・田上時子さんをお迎えし、暴力、いじめ、虐待にわが子があった時、親としてどう対処すればいいのか、ということについて講演いただきます。
・10月26日(月)　10:00〜12:00　・一般￥1000、会員￥500

◆　◆

全員参加型フォーラム「“教育”って何だ！」

いろんな「教育」があって、いろんな「学校」があればいい。従来の学校制度を越えて、これからの「教育」を考える全員参加型フォーラム。すべての人が、「それぞれの生き方」を学んでいくかたちを、教育の原点に立ち返って、ともに探っていきます。ゲストは東京大学助教授・汐見稔幸さんほか、多彩な「先生たち」。司会はフリーライター・野寺夕子さん。
・11月9日(月)　18:30〜21:30　・一般￥1000、会員￥500

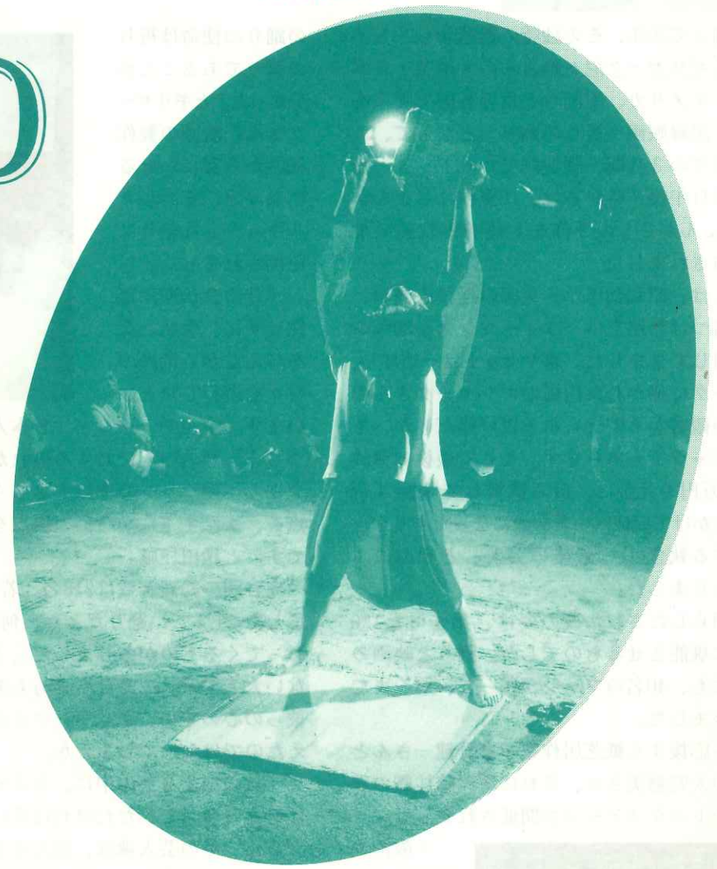
サリュ VOL.10
應典院寺町倶楽部のニューズレター
発　行　日　1998年10月12日
（偶数月発行）
編　集　人　池野　亮
発　行　所　應典院寺町倶楽部
〒543-0076大阪市天王寺区下寺町1-1-27
TEL06-771-7641
FAX06-770-3147

應典院寺町倶楽部のニューズレター

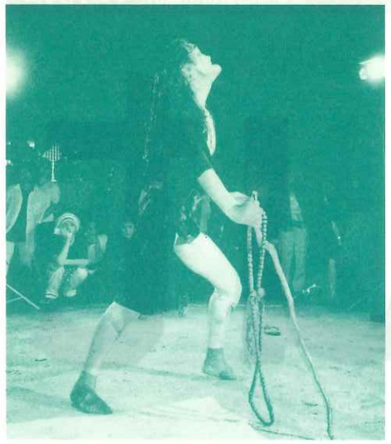
Salut

［サリュ］
フランス語で救いの意

1998 OCTOBER
vol. 10



毎日、いろんな出来事があります。がなり立てるテレビの声を聞いて、驚いたり、起こったり、悲しんだり……。しかし、ふと自分のまわりを見渡してみると、何事もないかのように平凡な日々。自分はいったい何をしたいんだろう、何者なんだろう。
夏、若者たちの歓声が應典院に響き渡りました。自分の思いや夢を語ったり、眩しいくらいに輝いていました。みんな自分の足で歩いていこうとしています。
みなさんも、應典院で、寺町倶楽部で自分の一歩を踏み出してみませんか。



熱演！「祈りの踊り」

ギリヤーク尼ヶ崎・映画「祈りの踊り」上映会

應典院寺町倶楽部主催事業

鬼の踊りから祈りの踊りへー。大道芸人・ギリヤーク尼ヶ崎さんの映画「祈りの踊り」上映会を、去る８月28日から30日まで開催しました。30年間、路上の夢を追い続けた彼の生き様には、こどばだけでは伝えきれない共感を、多くの人々の心に残しました。

世界の街角で踊って30年、その独特の舞踏から「鬼の踊り」と呼ばれるギリヤーク尼ヶ崎さんの大道芸。日本国内はもちろん、アメリカ、中国など世界各国で喝采を得たその踊りが、記録映画「祈りの踊り」となって、８月28日から30日までの３日間、應典院でロードショー公開されました。28日午後７時からは、代表作「じょんがら一代」「念仏じょんがら」の２作を大蓮寺本堂前の境内を舞台に、上演されました。

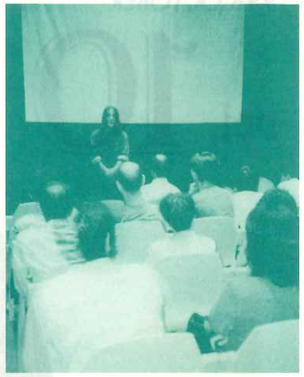
ギリヤークさんは、昭和43年から全国の巡業を開始、青空公演と自ら名づけた路上のパフォーマンスを30年の長きにわたって演じてきました。幕やセットは一切なし、ただ路上にチョークで描かれた円弧がギリヤークさんの舞台。行きずりの観客から寄せられる投げ銭だけが、ギリヤークさんのギャラでもあります。そして最後の葬式代にと残した100万円を元金に、自ら監督して映画「祈りの踊り」を１年かけて完成。いま67歳になったギリヤークさんの芸に対する執念は、「最後の芸人」と呼ぶにふさわしいものがありました。

夏の闇の中に照らしだされた彼の姿は、集まった120名の観客を十分に堪能させるものでした。踊りと映画の終了後の交流会にも、40名のファンが残って、遅くまで懇親の集いが続きました。

29日には、彼を応援する紙芝居作家・東野健一さんとフリーライターの大野慈美さん、それに應典院住職の秋田さんを交えてのトークステージが開催されました。



「阪神大震災の１ヵ月後、長田の菅原商店街で踊りました。死者の無念の思いが残っている場所で演じて、私の踊りの使命は祈りの踊りであることが分かった」とギリヤークさん。映画の製作秘話から芸にかける情熱など、そのエネルギッシュな語りに圧倒されました。



「昔の念仏聖は定住せずに、念仏と芸を与えながら庶民の村々を遊行したといいます。空也や一遍など、日本人にはそういう乞食（こつじき）漂泊の人に対する憧れがありますが、ギリヤークさんへのファン心理はまさしくそれ。宗教と芸能の接点を、また生きながら芸の原点を見せていただいた感じです」と秋田住職。

３日間の総観客数は218名。若い人たちの姿が目立ちました。「すごい踊りだった。何かわからないけど、伝わってくるものがありました」、「今まで出会ったことのない大人です。こんな生き方もありだなと思いました」。彼らの心の中に、ギリヤークさんの姿は、強い衝撃を与えたのではないでしょうか。

「私の演ずる芸の中に、ささやかでも日本人の心の一面をくみ取っていただければ幸いです」と語るギリヤークさん。その芸人魂は、衰えるどころかますます燃えているようでした。

今回の上映会の初日には、ギリヤークさんの青空公演があり、舞台となった大蓮寺境内は黒山の人だかり。白熱ランプに照らしだされた赤ふんどしの老人の踊りを、観客はどのように見たのでしょうか。

その時の模様を、應典院で活動を進める「三人会」の槇邦彦さん（お仕事は劇団の制作）にご寄稿いただきました。（右頁）

日常を破る人

槇　邦彦

夏休みもあと３日。僕はまだ宿題に手をつけていない小学生のように憂鬱でした。やればやるほど仕事がたまる。些細なことをこなすだけで日が暮れる……。

これっぽっちのことでも、自分しか見えなくなってきます。体もなんだかだるくなる。もう地球温暖化なんて知ったこっちゃないです。

しかしそれはギリヤークさんを見るまで。ギリヤーク後の僕は、それまでが嘘のようにさっぱりと元気になりました。

どうしてそうなったのだろう。

夕日がまだ沈みきっていない薄暮の中、地面に座ってギリヤークさんをみんな待っていました。そこで僕は「明日中にはあれを仕上げて次にはどーたらこーたらで……」と、自分一人の世界の中へウニウニとはまり込んでいました。

その時です。

いつの間にかギリヤークさんが現れ、片膝を立て伏目がちに鋭く辺りを見回していました。そして腹の底から「ふん！」と短い気合を入れ、ぷっと両手に唾を吐きかけました。鞄の中からいろんな袋を出しては引っ込め、横へずらしてまた戻す。そんな所作を繰り返し、ギリヤークさんは淡々と身支度を進めていきました。



槇　邦彦さん

インパクトが強くて僕は目が釘付けでした。と同時に考えました。

人前で服を着替えて化粧をする。しかもふんどし姿。日常レベルで考えると間違いなく変人だ。異形だ。

なんでそんなことをしているのだろう。

誰に見せたいのだろう。



ナゾが深まる中、たっぷり時間をとって納得のいくまで身支度を整え、ギリヤークさんは初めて声を張り上げた。高く、張りつめた声でした。「じょんがらー、じょんがらー、じょんがらー。」

震える指をぐっと伸ばしてカセットテープレコーダーのスイッチを入れる。ラッパスピーカーから耳を突く三味線の音。ギリヤークさんが上を向き、一歩踏みだした顔は、古い自転車のサドルに見えました。以下、説明不可能。

ナゾの手がかりは僕なりにつかみました。

ギリヤークさんは人一倍感性が鋭く、恥ずかしい気持ちも並ではないはず。だからこそハードルを高くして自分を超えるのです。

そして僕のように日常レベルでひーこらしている人に、もっと深いところがあることを伝えているのです。ウニウニした自分だけの世界のさらに奥へ、真っ先に飛び込んで周りを引きずり込んでいく。

その深いところに気付くから人は癒される。だから僕は元気になったのだと思います。実はその日應典院に行ったのは、イベントの打ち合わせが目的でした。ギリヤークさんを見て、断るつもりの話しも引き受けてしまった。これを書くことも。

原稿用紙１枚以上の文章を書くのは久しぶりです。いつも学ばせてもらっていると感謝しています。

EVENT REPORT

第11回寺子屋トーク　野田正彰さんと語る



去る９月30日、精神医学者・野田正彰さんによる第11回寺子屋トーク・「人が人としてつながりあえる社会のシステムづくり」が開催されました。参加者は59名。あらゆる事件を通して見えてきた社会の問題点を鋭く追求し、問題解決には「新しい社会のシステムづくり」が必要であると主張し続けている野田さん。今の子どもがおかれている状況についての講演をもとに、参加者とともに、教育の問題やシステムづくり、コミュニケーションの問題などについての対話が繰り広げられました。

登校拒否や家庭内暴力、校内暴力、そして、いじめへとつながる1970年代以降の子どもに関わる問題を解くキーワードとして、野田さんは「日本的情報社会」のありようを話されました。

「情報というものは動機があって選ぶものだが、現代の子どもは情報に溺れ、動機を失っている」、「人との関係の中でも、同じ情報を共有していないと不安になる」……。

また、コミュニケーションの問題として、「相手のおかれている状況に対する想像力や、自分の中に起こっていることを表現する力が希薄」ということを指摘。子どものみならず、私たち自身の問題としての「関わりの希薄さ」を意識させられる話でもありました。関西こども文化協会と共催。

夏の應典院で燃えた！

座談会

「出会い」がいっぱい、若者たちのチャレンジ企画！

8～9月は、若さがいちばん輝く季節。
應典院でも、若者たちの手作りによる、ユニークな3企画が、盛大に開催されました。
いずれも、應典院が準備段階からサポートしてきた協力事業。その仕掛け人に集まってもらい、夏に燃えたイベントの全貌について話し合ってもらいました。

オープンなお寺でそれぞれの集い

――この夏、それぞれユニークな企画を應典院で実施されましたが、まずその発端についてお願いします。

佐藤／真夏の8月15・16の2日間、應典院を会場に「20代サミット」を開催しました。もともと全国の20代のネットワークがあちこちにあったものを、東京・名古屋・大阪と東海道ラインで結び付けて、さらに大きなネットにしようというもので、今回で3回目、大阪では初の開催になりました。

とかく世間ではサメてるといわれる20代ですが、そんなことはない。いろんな20代が飾りを捨てて出会うことで、探しものに出会うことができるんじゃないか。應典院のキャッチコピーの「ひとはあなたに出会って、わたしになる」の通り、「出会い」をキーワードに企画されました。

宮田／わたしは、多文化共生センターというNGOのスタッフとして、8月22日に應典院をお借りして、「アジア子ども地蔵盆」を実施しました。大阪は在住の外国人、とくに韓国や中国などアジアの人が多い都市ですが、当然その子どもたちも大勢生活しています。でも一方で子どもたちがうまく日本の文化に馴染めず、友達がいない、遊び場がない、という現実もあります。

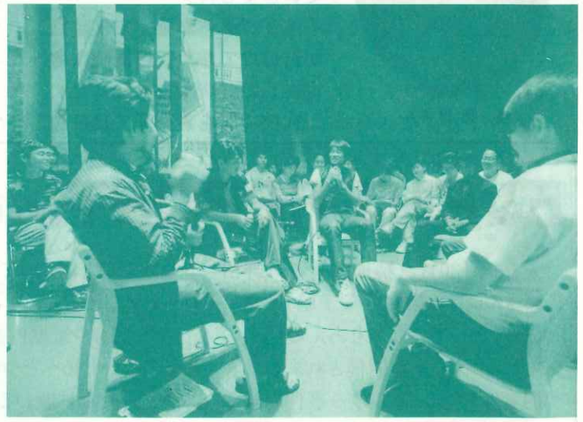
実は、わたしもこれまで地蔵盆を知らなかったんですが（笑）、伝統的な風物詩にふれて、遊びながら子どもたちに日本の文化を体験してもらえたら、と企画しました。

南河／9月15日に、應典院を会場に「SGA＝高校生モデル国連」を開催しました。SGAとは、STUDENT GLOBAL ACTION の略称で、府立高校の国際教養科に通う高校生たちによって構成されています。参加した高校生が、ひとつの国の代表を受け持って、国連をシュミレーションしてみるという内容で、今回で3回目になります。

最初、会場がお寺ということで、まわりから抵抗があったんですが、来てみると全然お寺らしくない（笑）。しかも、住職がNGO活動にも理解があって、このお寺なら大丈夫（笑）と、準備期間もずっと部屋をお借りして、打合せを重ねてきました。

宮田／お寺って、固くて窮屈なイメージがあるでしょ。その点、應典院はすごくオープンで、お洒落ですよね。

佐藤／ぼくも、最初こんなお香の匂いとミスマッチなお寺があるのか、とびっくりしました（笑）。でも、そのアンバランスがすごくいい。いまはギャップが勝負ですから（笑）。



「20代サミット」（應典院協力事業）では、應典院を会場に1泊2日のべ400人の若者が全国から集まった。教育や環境など社会問題、若者の生き方、さらに音楽や大道芸のパフォーマンスで盛り上がった。ゲストには、政治家、官僚からお笑い芸人、Jリーガーまで多士済々。

若者たちの今をアピール

――どのイベントも相当大きな規模のものでしたが、準備中からいろいろ苦労もあったと思いますが…。

宮田／「アジア子ども地蔵盆」では、いろんなイベントが館内で同時進行していくんですが、地蔵盆の提灯を親子で作ったり、アジアの音楽や遊びにふれたり、アジアのお菓子やお茶を味見したり、できるだけ子どもが体験できる企画を用意しました。見るだけじゃなくて、参加することで、何かたいせつなものに気づいてくれたんじゃないでしょうか。

子どもって、遊んでいるとすぐ友だちになれるでしょう。遊びを通して、外国と日本の親子がいっしょにかかわれるような機会ができたらいいなと思う。

佐藤／「20代サミット」のサブタイトルは「そうぞうしい奴らのお祭り」。「そうぞう」というのは、イマジネーション（想像）とクリエーション（創造）とノイズ（騒々）の3つをかけた言葉なんです。要約して言ってしまうと、とにかく考える前にやりたいことやろう、ということかな。

本番では、今がんばってる多彩な20代、政治や市民活動、アートやスポーツ、ビジネスなどで活躍している面々をゲストに、トークやパフォーマンスを通してメッセージしました。でも、どの20代も夢にあふれているわけじゃない。空回りしそうな自分を、この場に投げかけることで、発見があり仲間が生まれる。「20代サミット」が、そのきっかけになってほしかったんです。

南河／SGAの高校生も、学校では普通科よりやや英語の授業が多いという以上のものはあまりない。本当の国際化というのは、環境とか貧困とか、世界的な問題をどうとらえるのか、ということだと思いますが、それが「モデル国連」の発想に広がった。3年前、大阪に国際教養科のある府立の9高校の生徒たちが、自主的にネットワークを作り上げていったんです。



佐藤大吾
「20代サミット」実行委員企画委員長。このたび自ら率いるバンドがプロデビュー決定。①'73 年堺市生まれ。②決断が早い。③何事も気にしなさ過ぎる。④ジュディ＆マリの存在を知ったこと。

宮田若奈
多文化共生センタースタッフ。夏の「ビールでOBON」を仕切った一人。① '70年宮崎県生まれ。②感動する。③人情味があり過ぎて。④映画「ショーシャンクの空で」



写真キャプション　①生まれ②自分の長所③短所④最近感動したもの

宮田／高校生だけでやっていく時、やりにくさはありましたか。

南河／それはもうたくさん（笑）。まず、高校生だから社会的な信用がない。後援とか協力をとりつけるのが、まず苦労です。学校の先生方もノータッチですので、企画の段階から全部高校生同士がやる。すると、意見の衝突がしょっちゅうあって、人間関係の調整に明け暮れるという事態もありました。

佐藤／すごいね。でも、そのがんばりって、つぎに生きてくる、だいじな経験ですよね。

南河／いま高校生に対する社会のイメージって、受け身だとか無気力だとか、けっしてよくないですよね。。高校生が中心のSGAの試みは、そういう意味ではすごく珍しいと思うんです。高校生も、こんなことを真剣に考えている、こんなことをやっているんだ、と大人たちにアピールしたかった、というのもぼくらのメッセージのひとつですね。



「アジア子ども地蔵盆」（應典院共催事業）では、総勢200人の大人・子どもの参加が。お盆にちなんだ遊び、音楽、食べ物など、さながらアジアの子ども博物館。館内では、ミニラジオで実況放送というアイデアもさすが。韓国の民族音楽チャングの演奏は、豊中第五中の中学生のボランティア出演。住職のお盆の話やアジアの紙芝居もあって盛り沢山。30名を超えるボランティアのパワーには圧倒された。

「出会い」の應典院に期待

佐藤／「20代サミット」は、人が出し物ですから、そういう意味ではすごく魅力的な人間が集まりました。同時に、彼らから元気をいっぱいもらった人も。

こんなにがんばってる奴らがいるんだから、何か目標を掲げて、ムーブメントを起こしたら、という意見もあるんですが、ぼくらにはその気もない。枠にとらわれずにやりたいことをやってる奴らが、共通の理念とか、新たな組織とかに興味をもつわけがないから。

南河／佐藤さんのいう、がんばってる人って、どういう意味なんですか。

佐藤／好きなことで飯を食ってる人、または食おうとしている人かな。やりたいことのために、今はやりたくないこともやっているのも含めてやっぱり夢を持って生きているかどうか、だと思うし、南河くんみたいに、やらなくてはならない失敗をどれだけしているかも、すごくがんばってる人なんだと思う。

宮田／30組の親子が提灯づくりをやったんですが、「こんな自由にやらせてもらえると思っていなかった」という声が多かったです。ルールに縛られず、自分たちで取り組んでいく



「SGA＝モデル国連」（應典院協力事業）では、約70名の高校生たちが参加。教育委員会や学校の先生も来たけど、企画・運営はすべて高校生の手によるもの。全体テーマは「児童労働」。そのために「いま、私たちにできる事」について話し合う。高校生たちの英語による議論は、頼もしさを感じる。

楽しさってあるよね。

佐藤／そう。参加する楽しさって、本当はそういうことだよ。

宮田／人に与えられるより、自分でふれてさわって感じることが、いちばん確かな経験ですからね。

南河／ぼくが1年間留学していたアルゼンチンでは、とにかくダンスがコミュニケーションなんです。踊れば全部わかりあえるような感じ。SGAでも、最後に南米のダンスをみんなでやって、知らない同士がつながっていくという参加型もありました。

宮田／学校では、できない体験だものね。

南河／それと、例えばストリートチルドレンについて、同世代が議論する機会なんて学校にはまったくない。その意味では、すごく貴重な経験だったと思います。また、今回の活動を通じて、いろんなNGOの方々とつながりができたということも、学校では得られない体験でした。

――最後に、應典院に望むことを一言ずつ。

佐藤／應典院の魅力は、いろんな人と出会えることだと思うんです。例えば南河くんみたいな高校生と出会いたいと思えば、すぐ情報がもらえるような、人間データベース的なつながりのシステムがあるといいな、と思います。個人的には、いつまでも、心のサポーターであってほしいです（笑）。

宮田／應典院は、何でもすごく自由にのびのびやらせてもらる空間です。ボランティアだけじゃなくて、音楽とか演劇とか、そういうアートも吸収して、大蓮寺の吉本芸人塚に負けない（笑）、芸能のメッカにもなってほしい。

南河／ぼくら高校生は、大人の人と話す機会がほとんどないんです。若者は若者だけで集まってしまって、世代ごとに壁ができてしまってる。高校生が、50代や60代の方と語り合うあうことって、すごく面白いと思います。

佐藤／今日の座談会もそうだけど、いろんな人と出会って、幅広い人間関係ができる場所として、應典院にはずっと期待しています。



南河大輔
佐野高校3年生。アルゼンチンの他、昨夏はロンドンのロイター社でインターンシップの留学経験も。①'79年泉佐野市生まれ。②前向きなところ ③いい加減④漫画のGTO.

VOICE

應典院で初の結婚式!!

去る9月27日、應典院で初めての結婚式が執り行われました。新郎の川久保善隆さんは、中川幼稚園の園長先生・川久保眞里子さん（寺町倶楽部会員）のご子息。結婚式を終えられてのご感想を、お伺いしました。



息子は、生野区の大阪善光寺の住職でして、この結婚が決まった時から当然ながら、式は仏式と決まっていました。ところがその場所に悩みました。自坊では、いろいろな問題があって難しい。けれどもホテルでは仏式ができるところが少ない。そこで、会員でもあるし、ふつうのお寺にはないモダンな新しい雰囲気でもあるしということで、應典院でお願いすることにしました。

いちばん感激したのは、ホテルでありがちな、たくさん挙式する中のひとつといった、いかにも型通りに進められているといった雰囲気ではなく、参列者はもちろん、導師をお願いした藤野立恭先生や媒酌人をお願いした秋田光茂先生ご夫妻、スタッフのみなさんまでが祝福していただいているという実感の中で、式が行えたことです。

應典院の本堂も、普段感じていた近代的な雰囲気が、儀式になると、照明や音響の効果もあってか、本堂全体が厳かな雰囲気に包まれ、広々とした空間の中で、その感激に浸ることができました。

きっと新郎、新婦も、自分たちだけの結婚式として、一生の思い出に残ることでしょう。應典院で交わした夫婦の契りを大切に、これから夫婦円満でがんばってほしいと願っています。

（写真は幼稚園の園児さんたちたちとのスナップです）

COMMONS FESTA'98「それぞれの歩き方」
11月3日にオープニング・コンサート!!



寺町倶楽部では秋のメイン事業として、来る11月3日～15日、「コモンズ・フェスタ'98～それぞれの歩き方」を開催します。

このフェスタは、應典院を舞台に、「福祉」「教育」「国際協力」など多彩な13のNPO（非営利の市民団体）が参加、それぞれの企画を持ち寄った地域ネットワーク型イベントです。同時にこれまでのように、一丸となる目標に集うのではなく、個々の生き方を尊重しながら多様な社会づくりを目指す、NPOのフェスティバルでもあります。

コモンズ・フェスタとは、異なった文化がぶつかりあって生まれる、出会いとつながりを願って、ネーミングされた造語。公（パブリック）でも、私（プライベート）でもない、第3の場として、共（コモンズ）の空間をNPOと應典院が協力しあって創造します。

お寺はかつて「教育」「医療」「芸能」などさまざまな日本の文化の原点にありました。その伝統を、NPOとともに今日に再生する試みは、お寺を核として、地域コミュニティーを再構築する手掛かりとなるでしょう。

オープニングはにぎやかにソングコンサートとワインパーティーで（入場無料）。会期中は18のイベントが連続開催されるほか、應典院全館でコモンズ・ギャラリーも開催されます。ワークショップあり、パフォーマンスあり、トークあり、フェスタではさまざまな人との出会いがきっとあるはず。みなさんのご来場をお待ちしています。

秋田住職発 應典院掲示板

秋のコモンズフェスタ、間近！

6月からずっと準備を重ねてきたコモンズフェスタが、いよいよ開催間近となりました。最初は福祉の写真展をやろうという小さな出発が、あれよあれよと広がって、規模の大きな企画となってしまいました。應典院にとっては初めての福祉のイベント、ぼくもまた障害をもつ多様な友人たちと出会う、すてきな機会をいただきました。

どれに参加していただいてもいいのですが、まずオープニングに来ていただければ、全体の概要のご紹介ができます。また、應典院にお気軽にお電話いただければ、あなたの関心に応じてイベントをご紹介することもできます。

ぜひあなたも。何よりも、参加することに意義ありです。

大盛況！　ビールでOBON

去る8月7日、お盆入りを前に、應典院夏の納涼会「ビールでOBON」を開催、70名の参加者で大いに賑わいました。

当日の裏方は若いボランティアが中心に受付から司会、さらにタイ・カレーの調理まで担当、またトランペットやギターの生演奏もあって、すばらしい夏の一夜となりました。

應典院の集いらしく、老夫婦や家族連れ、恋人同士などさまざまな世代が参加、会場となった1階のロビーは立錐の余地のない盛況ぶりでした。

應典院次の交流会は、12月26日（土）の年忘れ交流会です。こちらもぜひご参加ください。

若い面々と、應典院の活動を

去る9月2日に「應典院／プレゼンテーションの会」を実施、こちらは應典院の今後について、意欲ある36名の青年が集まって白熱した議論となりました。

應典院の趣旨を理解して、もっと自由に活動を創造してほしい、とぼくが発題。それを受けて、参加者同士が小グループに分かれて、自由にセッションを行いました。

具体的には、参加者のなかから、イベントやギャラリーの企画があがっており、会のつながりを深めながら、今後の広がりを企図していきたいところ。

恒例！　トークサロン

新人参加でにぎわった9月のトークサロンは24名の参加。初対面の人同士、大いに話が弾みました。友だちもできます。心、癒されます。

今後の予定は以下の通りです。

10月…3日（土）14日（水）
11月…18日（水）
12月…5日（土）9日（水）

※土曜日は14時、水曜日は19時開会。

【新入会員ご紹介】
（1998年8月7日まで）

8月8日以降にご入会いただいた方々です。ありがとうございました。

○一般会員
【大阪府】
須田　泰行　大阪市東成区
森川　温美　大阪市東住吉区
武藤　貴信　高石市
伊藤　伸二　寝屋川市
村井　秀行　堺市
【兵庫県】
森栗　茂一　神戸市西区
北風　康英　宝塚市
【京都府】
田中　雅恵　向日市

○学生会員
【大阪府】
南河　大輔　泉佐野市

以上9名